

## 1 自己評価及び外部評価結果

### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4590300192		
法人名	株式会社 山崎産業		
事業所名	大瀬別荘G.H.	ユニット名	愛宕
所在地	延岡市古城町3丁目11番地12		
自己評価作成日	令和3年11月17日	評価結果市町村受理日	令和4年1月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php?action_kouhyou_pref_search_list_list=true">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php?action_kouhyou_pref_search_list_list=true</a>
----------	---

### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階
訪問調査日	令和3年12月14日

### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・「自宅で過ごすのと同じように」との理念から、思い出の写真、家具などを自由に持ち込んでいただき、室内レイアウトはご家族と話し合っている。「多くの年齢層が力を合わせ」という理念から、20代から70代まで職員は各年代ごとにおり、様々な伝統や文化、IT等の知識の違いを教え合いながら活動している。「四季の実感」という理念から、行事食に力を入れ、季節ごとに地域で食べられているものを提供している。また、地域でとれる季節野菜をオープンキッチンで調理し、現物を見てもらいながら料理を提供している。「生きる喜び」という理念から、音楽療法や季節のイベントで楽しめるよう工夫している。「地域の資源」という理念はコロナ禍で難航したが、地域の訪問理美容を活用し、整容の基準を落とさないようにした。また、「こどもの水辺協議会」という公園計画の話し合いにも参加し、地域の一員として活動している。

### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

利用者の要望を聞き入れ、受け入れることができるホームになっている。経験豊富な職員が運営者や管理者と職員のあいだのクッションの役割になり、職員は運営者や管理者と相互に意見や相談をし合える関係にある。災害時対応について細部にわたって検討している。高台で岩盤がしっかりした敷地にホームが建っており、会議室を地域住民の避難場所として提供できるよう寝具も準備できている。運営者は職員の外部研修受講や資格取得に向けた支援を行っている。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所理念を事務所や多目的室、職員休憩室など目に触れる場所に掲示し、毎日朝礼で唱和している。職員は常に理念を念頭に置き、共有し実践に繋げている。	理念をホーム内に掲示し、朝礼で毎日1項目唱和して、常に理念を共有し実践に繋げている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍につき、屋外活動を自粛しており、地域交流は減少しているが、地域の住民や出入り業者などへの挨拶や情報交換は行っており、地域の一員として認めて頂けるよう努めている。	区に入会し地域とつながりがあり、地域の方からの声掛けで子どもの水辺協議会の一員として管理者が参加し、公園の意見交換会に出席している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	以前は地域交流を行っていたが、新型コロナウイルス感染予防の観点から、現在はほぼできていない。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍につき開催を見送っていたが、6月、10月と開催ができ、状況報告や話し合いを行うことができた。意見をサービス向上に活かす事ができている。また、施設発行のお便りを発送し、ご意見を頂ける様にしている。	会議のメンバーから地区の一員として、地域の会参加の働きかけがあり出席している。利用者に対するねぎらいの言葉かけを提案され実践している。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	利用者に関する事、運営についての疑問などがあれば、その都度電話での相談や直接訪問して助言や指導を受けるよう取り組んでいる。運営推進会議に出席を依頼し参加協力を頂いている	担当課の職員が運営推進会議に出席しているので、ホームの状況を伝えており、いつでも相談できる関係が構築されている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関する研修を年間プログラムに沿って職員研修にて実施している。施設内全ての出入り口は鍵を施錠せず、自由に出入りできるようにしており、外に出られる利用者には職員が付き添うか見守りを行っている。	身体拘束適正委員会による職員研修を実施し、利用者に合わせた転落防止などに工夫がみられ、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。外出願望のある利用者に対しては、玄関前にある憩いの広場のソファを活用している。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待に関する研修を年間プログラムに沿って職員研修で実施している。事前学習で職員一人一人が自己学習を行い、また個別事例検討を行い、ケア技術の向上を図っている。			

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前に成年後見制度を利用する利用者があり、理解を深めた。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約締結時にはできるだけわかりやすく、丁寧な説明を行い、同意を得るように心掛けている。ご本人や家族の心配や不安、疑問点について質問には丁寧に対応し、納得と同意をいただいている。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族の要望があれば、その都度対応し、苦情報告書に記載し速やかに改善し対応する。以前は家族会を開催していたが、コロナの影響や家族会会長の家族の転出に伴う辞任により開催できていない。		面会時に家族から意見や要望を聞いている。利用者や家族からの要望はできるものは即対応している。困難な場合は、話し合いを重ねながら改善できるよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	朝礼、主任会議、ユニットカンファレンス、各種委員会会議、厨房会を開催し、毎月の職員研修で報告、検討、協議して運営に反映している。個別の相談については都度管理者が対応している。		管理者と職員は相互に意見を言ったり、相談しあえる関係にあり、提案された意見を運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤務時間の順守、提出物の提供状況、研修への参加状況なども加味し、向上心を数値化し、評価できるようにしている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月、職員研修会を実施。講師には職員がなることもある。法人外では実践者研修や各種研修、講習をコロナウイルス感染状況を考慮しながら受講している。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	様々な施設からの見学や講習への参加があったが、現在はコロナ禍の為、激減している。			

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期には利用者はリロケーションダメージのため周辺症状が悪化する傾向になることを職員は理解している。それらについて受容共感しながら納得のいく対応を心がけている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設入所は家族にとって悲しみ、苦しみ、罪悪感、などがあることを職員全員で共有しておく。施設利用に関して家族が不安に感じる事を傾聴し丁寧な説明を行い職員も一緒に考え対応する体制を取っている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービス開始前に本人と家族が必要とする支援を面接、状態観察等で見極め、マネジメントする。医療的支援はかかりつけ医、訪問看護師、訪問歯科、薬剤師と情報を共有し、より良いケアを提供できるよう努めている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の残存機能は何かを見極め、自宅で過ごす事と同じようにできる事はやって頂くようにしている。職員と一緒に生活する家族のような関係を築いている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍の為、面会制限があり、回数が激減したが、来荘時には状況報告や情報交換を行いコミュニケーションを図っている。電話を希望する利用者にはできる限りすぐに電話をかけるようにしている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍の為、会えていないが、馴染みの人や場所、思い出話等を傾聴し対応している。要望あれば電話で対応したり写真を飾る等対応している。	コロナ禍で制限があるが、ホームで規則を作成し玄関や風除室での面会ができるよう支援している。家族対応の受診の機会を利用している。医療との連携や体調コントロールなど一時帰宅できるタイミングをはかり家族との時間を支援している。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	唄の得意な利用者の歌に耳を傾け拍手をしたり、利用者のできることを他の利用者が賞賛したりしている。できる利用者は他の利用者の配膳下膳を手伝ったりもしている。			

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も電話などでの問い合わせに適切な対応を取っている。			
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人希望の家具や日用品を使用したり、家族や思い出の風景の写真を居室に飾ったりしている。生け花を活けるなどの本人の趣味を尊重している。おやつや食事なども利用者の希望に沿うようにし、本人本位の介助を心掛けている。		職員は利用者一人ひとりの思いや希望の把握に努めている。困難な場合は、家族からの聞き取りや、日々の表情や行動から汲み取っている。多くの利用者が思いや希望を表出できている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	今までの生活を家族や、前任のケアマネジャーから聞き取る。また普段の会話や個人台帳をから把握し、利用者理解を深めている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	家族からの丁寧な聞き取り、個人台帳の充実、個別の状態観察を通して行っている。また、残存能力や新たに集団の生活で獲得した能力を生かした自立支援も心掛けている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人のアセスメントを充実する。本人にとって良いサービスや計画は何かをユニットカンファレンスで職員と話し合い、共有し計画を立てている。		毎週カンファレンスを行い介護計画について話し合っている。現場の職員のモニタリングを反映させた介護計画を作成している。日々の個人記録の記述が介護計画に反映されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	プランで実施したことや日頃と比べ異なる事を記録に書き、必要に応じてケアマネや職員間で共有し、カンファレンスを行っている。また計画実践の後はモニタリングを行い再アセスメント、プランニングに繋げている			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	昔、華道を行っていた方に対し、見守りを徹底し、実際に華道を行ってもらっている。音楽療法士による音楽での回想療法を実施している。相撲が好きな人には相撲のTVを見る、オリンピックが見たい人には対応する等している。			

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今はコロナ禍で地域資源との協働が難しいが訪問理美容サービス、訪問歯科診療、訪問看護サービス、など地域の専門家と共同している。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所時、協力医の説明を行い今までのかかりつけ医にするか選択してもらっている。定期受診、他科受診に職員が同行したり、ご家族と連絡を取りながら受診の補助したりして支援している。	協力医がほとんどの利用者のかかりつけ医になっているため緊急時の往診対応もできている。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	24時間対応の訪問看護への緊急連絡体制を整え、看護を受けられるよう支援している。医師より特別指示書が出た場合はより濃厚な看護サービスを提供できる体制を作っている			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力医と相談したり、当該病院で開催される退院時カンファレンスに参加するなどその時々々の状況に合わせて病院関係者との関係性を作っている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期についての希望を入所段階から聞き取っておく。いよいよ重度化した際には家族の意向は変更も多いのでその都度確認する。利用者の状態が最も悪くなった際、ご家族と相談し、可能な限りの支援を行っている。	重要事項説明書の中に「重度化した場合における対応に関わる指針」と「延命治療に対する指示書」で説明し同意書で方針を共有している。状態や方針の変化がある時はその都度相談している。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	本施設には医療資格者はいないので、急変や事故発生時には電話で2分から3分で到着できる訪問看護師に連絡することとしている。そのマニュアルを目立つところに掲示している。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の消防訓練を実施している。前回は消防署の予防課と現場指揮隊の職員にも参加してもらい講評を頂いた。	消防訓練は夜間を想定して行っている。平常時に試食することで備蓄食料が利用者にとって食べやすいものになっているか判断している。災害時に職員がホーム2階の会議室や宿直室で宿泊できる体制になっている。		

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人の個室とリビングを使い分けている。一人になりたいとき、休みたいときはいつでも居室に戻れるようにしている。職員の言葉使いは丁寧語を基本にしながらも地方の方言や言葉使いをあえて使う時もある。	居室の中にしきりのカーテンが設置してあり居住空間のプライバシーが確保できている。尊厳を大切に、慣れにならないよう配慮した言葉かけや対応をしている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	できる限りゆっくり話を聞くことを基本とする。話を傾聴したり、やりたいこと、会いたい人、食べたいもの、など具体的に話をする。その中でできる範囲で実現できるように支援している			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝時間通りに起きたくない日は朝食を遅らせる。入浴に気が進まなければ翌日にする。介護に同姓を希望する人には意向に沿うようにする。などを大切にしている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	全面的に着るものは自由である。希望者はお化粧をするが希望しない人には強制はしない。訪問理美容サービスを使うか行きつけの理美容院を使うかも自由であるが、コロナ禍なので今回は全員訪問で対応した。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	オープンキッチンで調理し、目の前で盛り付ける。調理の音やにおいが伝わるようにしている。お茶の葉を小分けしたり、エンドウ豆の皮をむいたりできることはする。配膳下膳もできる人は自分でしたり職員を手伝う。	季節の食材や乾物、おから、豆類、根菜類など高齢者の体調に配慮した献立を提供している。また個人の嚥下状態に配慮した食事形態を提供している。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎月の体重測定で、個人が食べる量を計っている。毎月の厨房会で栄養バランスを考え献立を立てる。水分は職員の意見も取り入れ、ミルク系(ミルクティなど)他、水ゼリー、麦茶、緑茶、などを提供している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、自分でできる人は自分で歯磨き、職員が点検、自分でできない人は職員が実施している。歯ブラシなどは天日に干して清潔を保持している。1週間に1度は訪問歯科の往診にて口腔内の異常がないかの検診、また治療を実施している。			

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人にあった、排泄についての検討をしている。布パンツを基本にしながら、パット使用、紙パンツ、おむつなどを試す。排泄パターンを把握しトイレ誘導を行い、トイレ排泄を優先した支援をしている。	排泄チェック表を活用して、さりげない声かけ、誘導を行ない、トイレでの排泄を支援している。一人ひとりに合わせたパットや紙パンツを検討の上、使用している。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日、ヨーグルトを提供したり、食事から自然な排泄ができるように乾物、おから、サツマイモ、小豆、野菜などを献立に積極的に取り入れる。また水分摂取の声掛け・時間を設けている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	本人の気持ちが乗らない時には無理強いせず、気持ちの変化を待って時間をずらしたり、入浴日を変更している。シャワーや一般浴の希望に応じる。同性介護希望者には希望に応じる。	週3回の入浴日は決めているが、拒否傾向の利用者には柔軟に対応し、入浴日以外でもタイミングに合わせ入浴を支援している。水虫のある利用者には毎日足浴と軟膏塗布を行っている。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	寝たい時間に居室に入ってもらい、個々の就寝時間のリズムを見守る。夜も一般的な就寝時間はあるが眠れない利用者はリビングでTVを見たり、お茶を飲んだりして自由過ごしている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	事前に職員同士で誤薬がないかの確認を行う。何の目的の薬を飲むか話をしながら、利用者の手のひらに載せて飲んでもらう。飲んだ後の観察を怠らないように異変があればすぐに対応する。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	できる方は、役割を持ってもらい食事メニュー書き、掃除などをされている。自主的にされない方には声掛けし、洗濯物たたみなどを促している。嗜好品でタバコ酒は遠慮願うが、菓子や果物など預かり提供する。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	以前は積極的に外出支援を行っていたが、コロナ禍の現在は状況を確認しながら感染対策を徹底している為、あまりできていない。	コロナ禍で外出制限があるが、ドライブや人のいない公園での散策、受診介助時に遠回りするなどできることで外出を支援している。		



自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	職員はお金の支援は行わず、事務所にて管理している。現在はコロナ禍で外出はできないので金銭が使用できるような場が発生することはない。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば電話をかけたりしている。自ら手紙を書かれる利用者はいない。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	温度計を見て室温や湿度に注意している。また、夏場はよしずを掛けて対応している。温度は常に適切な温度に管理し、湿度にも気を付けている。コロナ禍で換気にも気を使っている。食事時には音楽を流す。		共用空間は過ごしやすい環境が保持され、居心地よく過ごせるよう工夫されている。天井から布で蛍光灯の一部を覆う形で、光に敏感な利用者に直接光が当たらないよう工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合った利用者様と話せるようにテーブル席の位置に気をつけている。利用者様からの要望がある時は席替えなどもしながら対応している。玄関前や玄関外に椅子を配置し一人になれる空間を作っている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた枕や椅子などを持ってきていただき、快適に居心地よく過ごせるように配慮し、その方の使いやすいよう一人ひとり工夫された居室になっている。			
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室がわからない利用者様には居室入り口に目印をして、何度も繰り返し説明することで目印を頼りに居室へ戻るよう試みる等の工夫を行っている。			